

佳作

Never give up

新潟県十日町市立中条中学校

1年 齊木 夏希

「しっかり考えて練習しろ！」

(考えてます。)

「なんでやろうとしないんだ。お前ならできるだろう！」

(やろうとしてます。)

「真剣にやれ！」

(真剣にやってます。)

——ああ、もうやだ、楽しくない。

私は、6年生のときに初めてバレーボールというスポーツに触りました。きっかけは、友達でした。誘われて見学に行ったとき、スパイクやサーブを打つところを見て、楽しそう、私もやりたいと思いました。運動は苦手でしたが、バレーボールの魅力は別でした。そのチームは人数が少なく、私はすぐにスタメンに入ることになりました。

私は、少しでも早くみんなに追いつけるように、たくさん練習しました。けれど、いくら練習しても、サーブは入らない、スパイクはネットにひつかかる、レシーブはボールがどこかに行ってしまいます。明らかにチームの足を引っ張っていました。コーチの厳しい言葉がさらに私を追い込みます。

こんなことが毎日のように続く練習。私はいつの間にか、楽しいと思っていたバレーをやめたい、つらい、楽しくないと思うようになっていました。チームメートが気を遣うように言葉をかけてくれます。

「私も最初はできなかったよ。」

けれども、当時の私には気を遣ってくれるチームメートの言葉が重く感じられました。

「なんであの子はできるようになったのに、私はいつまでたってもできるようにならないの。」

と一人泣いたことまでありました。

ある日の練習のことでした。サーブ練習をしていたとき、私の打ったボールが初めてネットを越えるのを目击しました。周りの人たちが私のところに駆け寄って、自分のことのように喜んでくれました。それからというもの、私は「できた！」が増えました。さんざんネットに引っかかったスパイク、どこかに行ってしまっていたレシーブのボール。今ではスパイクはコートに入るし、

レシーブだってしっかりセッターに返るようになりました。

私は、中学校でもバレーボールを続けることにしました。やはり部活動は2年生中心で、1年生の私たちは、あまり練習の機会がありませんでした。来る日も来る日もボール拾いばかりでした。そんな中、1年生からベンチ入りするメンバー2人がコーチから発表されました。11番、○○さん、12番……、ベンチ入りできるのは残り1人だけ、私の心臓はバクバクしていました。

「12番、齊木夏希さん。この2人に決まりました。」

この言葉を聞いた瞬間、素直にうれしいという気持ちがこみあげてきました。それとともに他のメンバーに負けないように練習しなければとも思いました。

今考えてみれば、数えきれないほどコーチには怒られました。けれども、コーチは下手だから怒っていたのではないのです。

「お前ならもっとうまくなれる、きっとできる。」

そう期待してくれているのではないでしょうか。だからこそ、強く厳しく選手には響くのでしょう。

選手に「つらい」というのはつきものであって、いつかその「つらい」はやってきます。そして、それを乗り越えたとき、自分の努力は無駄ではなかったと気づく、私はそう思います。

「いってきます。」

自分の成長を見届けるために、私は今日も大好きなバレーの練習に行きます。